

驛鈴がつなぐ松阪市と島根県浜田市

第4代松坂城主であった古田重治公が、今から約400年前の1619年に石見国浜田に転封され初代藩主となりました。また、浜田の第12代藩主の松平康定公が、松阪の国学者本居宣長に贈った「驛鈴」は、現在もお松阪市のシンボルとして市民に親しまれています。このように、松阪市と浜田市は歴史的なご縁を持つことから民間交流が始まり、平成28年4月2日には「驛鈴で結ぶ松阪市・浜田市 観光・文化交流協定」が締結され、両市の絆はより深いものとなりました。

後野神楽社中(うしろのかぐらしゃちゅう)の紹介

大正9年に結成されたと伝えられる前身の社中が昭和48年に後野神楽社中の名で改称され、現在に至ります。

八調子神楽約30演目を伝承しながら、平成15年には浜田藩の史話を題材とした創作演目「鏡山」を制作し、石見神楽を通じて郷土の歴史を広く紹介しています。また、伝統の継承・青少年の健全育成にも努め、皆様感動を与えられる神楽を目指し、日々精進しています。

演目紹介

【岩戸】(いわと)

天照大御神(あまてらすおおみかみ)が、弟・須佐之男命(すさのおのみこと)の乱暴に困り天の岩戸の中にお隠れになったので、世の中すべてが闇夜(とこやみ)となりました。そこで神々は集まって相談し、天宇津女命(あめのうずめのみこと)を呼んで躍らせ、長鳴鳥(ながなきどり)を鳴かせ、不思議に思った大御神が岩戸を少し開けたところを力持ちの手力男命(たちからおのみこと)が岩戸を開き迎え出し、再び世の中が明るくなり禍も無くなり平和が戻りました。天宇津女命の岩戸の前での舞いが神楽の起源であるといわれ、石見神楽の中でも特に神聖な演目とされています。

【恵比須】(えびす)

大国主命の第一の御子で美保神社の御祭神とされる八重事代主命(やえことしろぬしのみこと)である、恵比須様を題材とした演目です。恵比須様が現れ、鯛を釣り上げ寿福をあらわすという、幻想的かつ大変おめでたい神楽です。鯛釣りの前に撒き餌として投げる餌には福が宿るとされているので、拾うことができた人には幸福が訪れるかもしれません。子ども達にとっても人気の演目です。

【鏡山】(かがみやま)

浜田藩第6代藩主の奥方に仕えていた岩藤局(いわふじのつぼね)は奥方に寵愛される老中の尾上(おのえ)を妬み、配下の諏訪(すわ)に命じて自らの草履と尾上の草履をすり替えさせました。尾上は急用でやむなく履いた草履が岩藤の物であったことから、岩藤にきつく咎められ、無念の自害を遂げてしまいます。これを知った尾上の召使いお初(おはつ)は、尾上が自害した懐剣で主人の仇である岩藤を討ちました。この演目は享保9年(1724年)の春に起こったと言われる「鏡山事件」を題材にした後野神楽社中の独自演目です。今年は鏡山事件から300年の節目の年にあたります。

【大蛇】(おろち)

須佐之男命(すさのおのみこと)が出雲の国・斐の川にさしかかると、娘を大蛇に食べられてしまうという老夫婦に出会います。そこで命は老夫婦に毒酒を作らせ、これを大蛇が飲んで酔った所を退治し、稲田姫と結ばれました。この時、大蛇の尾から出た剣は、天の村雲の剣(あめのむらくものつるぎ)《のちの草薙の剣(くさなぎのつるぎ)》として三種の神器の一つとし、熱田神宮に祀られています。大蛇が大きな胴をうごめかせ、火を噴き暴れまわる様は息をのむ大迫力で、石見神楽の代名詞といえる演目です。

※石見神楽について、詳しくは石見神楽公式サイトをご覧ください。

石見神楽 - 島根県浜田市 石見之國伝統芸能 - 石見神楽公式サイト
<https://iwamikagura.jp>

